



Title	研究室報
Citation	独語独文学科研究年報, 14, 61-64
Issue Date	1988-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/25761
Type	bulletin (other)
File Information	14_P61-64.pdf



[Instructions for use](#)

研 究 室 報

講 義 題 目 (昭 和 62 年 度)

学 部

独 語 学 概 論		植 木 迪 子
独 文 学 史 概 説		青 柳 謙 二
独 語 学	独語学の基本	植 木 迪 子
独 語 学	Deutschunterricht für Fortgeschrittene	T. Beckmann
独 文 学	19 世紀レアリズム文学	渋 谷 寿 一
独 文 学	Freud und die Psychoanalyse	L. Jäger
独 語 学 演 習	中高ドイツ語	清 水 誠
独 文 学 演 習	Einige moderne Erzählungen und deren Interpretationen	青 柳 謙 二

大 学 院

独 語 学 演 習	Ellipsen und fragmentarische Ausdrücke	植 木 迪 子
独 語 学 演 習	ドイツ語統語論	清 水 誠
独 文 学 演 習	Methodenprobleme der deutschen Literaturwissenschaft	青 柳 謙 二
独 文 学 演 習 (1)	Geschichte des deutschen Wortschatzes und der deutschen Wortbildung	T. Beckmann
独 文 学 演 習 (2)	G. W. Leibniz : Monadologie	T. Beckmann
独 文 学 演 習 (3)	Wolfgang Borchert	T. Beckmann

昭和 61 年度論文題目

卒業論文

- 有馬 香 『ドイツにおける俳句についての一考察』
— 俳句からハイクへの変遷とその現状 —
- 奥山 朋宏 伝承に現われる Kuckuck のイメージを探る
- 中村 聖司 『ダントンの死』に読み得る諸問題
- 福地 素子 P.ハントケの戯曲『カスパー』に関するテキスト分析の試み

北海道大学ドイツ語学・文学研究会会則

1. 本会は北海道大学ドイツ語学・文学研究会と称する。
2. 本会はドイツ語学・文学の発展に寄与することを目的とする。
3. 本会は上の目的達成のため下記の事業を行なう。
 - 1) 機関紙「独語独文学科研究年報」を毎年1回発行する。
 - 2) 合評会、研究会、講演会等を随時行なう。
4. 本会員は北海道大学文学部独語・独文学研究室の教官・院生（学生も含む）ならびにその趣旨に賛同する者によって構成される。
5. 本会員は上の活動の遂行のため所定の会費を支払う。
6. 本会は1名の会長と若干名の幹事をおく、幹事は会計および編集委員を兼任する。
7. 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり3月31日をもって終わる。
8. 本会の事務所は北海道大学文学部独語独文学研究室におく。
9. 本会に賛助会員をおく。

研究室行事記録

- ◎ 昭和62年2月21日に、昭和61年度卒業論文発表会が文学部第一会議室で行われた。
- ◎ 昭和62年5月26日に、『研究年報』第13号の合評会が独語独文学研究室で開かれた。
- ◎ 昭和62年には、文学部419室で下記の研究会がもたれた。

・7月11日

最上 英明：「補文標識の選択について — daßとzuをめぐる —」

・11月14日

佐藤 修子：「DDR夏期講習会の報告」

植木 迪子：「1987国際語用論学会の報告」

<研究発表>

- ◎ 昭和62年には下記の研究会・ゼミナールで会員の発表が行われた。
 - ・第4回テキスト研究会（5月8日：東京ゲート・インスティテュート）
佐藤 修子：「テキストの視点からみたドイツ語教授法の問題」
 - ・第16回 Linguisten-Seminar（8月31日～9月4日：浜名湖レークサイド・プラザ）
清水 誠：Kasus und grammatische Relationen im Deutschen und Japanischen
 - ・第7回夏季言語学ゼミナール（10月31日～11月3日：岩手山麓国民休暇村）
植木 迪子：Fragesätze, Fragen und Antworten

<会員動向>

- ◎ 昭和62年4月に森田一平氏が Augsburg 大学から、また8月には岩井洋氏が Tübingen 大学から、江口豊氏が Düsseldorf 大学からそれぞれ留学を終え帰国した。9月には高橋修氏が München 大学へ留学のため出発した。
- ◎ 川島淳夫氏が昭和62年4月から9月まで、Duisburg 大学に客員教授として滞在された。
- ◎ 昭和62年10月に、Till Beckmann氏による下記の当研究室史が刊行された。
Das Deutsche Seminar der Hokkaido-Universität in Sapporo. Von seinen Anfängen bis 1985. München (Indicium), 1987.

会 員 名 簿

◎青柳謙二	石川克知	石橋道大	伊藤祐紀子
岩井洋	岩田聡	植木迪子	梅津真
江口豊	○海老塚冬衛	小澤幸夫	加藤寛蔵
川島淳夫	川東雅樹	岸川良蔵	佐藤厚
佐藤修子	佐藤俊一	※塩谷饒	清水誠
神久聡	鈴木将史	瀬川修二	○高橋修
高橋吉文	○田中慎	田中剛	対馬晃
寺田龍男	中川勝昭	西川智之	藤本純子
三浦國泰	○最上英明	森田一平	山田恵子
山田善久	Till Beckmann		

◎は会長 ○は幹事 ※は賛助会員

独語独文学科研究年報 第14号

昭和63年1月発行

発行者 北海道大学ドイツ語学・文学研究会
編集委員 最上英明 海老塚冬衛 田中慎
連絡先 北海道大学文学部独語独文学研究室内
060 札幌市北区北10条西7丁目
印刷所 北大印刷
